

丸吉(八戸)と市内就労支援施設タッグ



親綱ロープとナイロン網を切り放す作業。漁網リサイクルは海洋保全のみならず、事業所利用者の収益にもつながっている=2日、八戸市内

却処分やめ分別回収
海守り利用者収入に

度の長期航海で約700枚にも達する。遠洋漁業に従事する船員に分別作業まで強いるのは難しく、これまで泣く泣く焼却処分してきた。

ただ 廃網はナイロン網と親綱のロープなどが複雑に絡んでおり、分別に膨大な手間と時間、人手がかかることがネックだった。

事業開始に当たってリサイクルに回したのは、丸吉所有の大型底刺し網船「第88正進丸」から出た廃網。

役によると、リサイクルに取り組んだのは、ナイロンで作られた網を水産関係者から買い取り、再利用する青森県外の業者を紹介してもらつたのがきっかけ。

世界的に海洋ごみの削減が叫ばれる中、八戸市内の企業が連携し、漁網のリサイクル事業に取り組んでいる。漁業会社「丸吉」は、これまで焼却処分してきた使用済み漁網の分別回収に着手。作業の一部を就労継続支援A型事業所「ライブワークス」に委託し、リサイクルの工程を確立した。持続可能な開発目標(SDGs)の視点や海を守る意識が求められる中、関係者は「取り組みが広がってほしい」と期待を寄せる。

(金濱千優希)

水産物の漁獲に欠かせない漁網は、消耗品であるが故に海上で逸失、放棄されることがある。持ち主不明で海中を漂うことから「ゴーストギア」（漁具の幽霊）とも呼ばれ、海洋汚染の一因となっている。

どのリサイクル事業を手がける「エコアリッジ」（中里明光社長）の子会社で、解体作業などに精通しているライブワーカスに作業を委託。市内にある作業場では、10人ほどの利用者がはさみを片手に、親綱と網を手際よく切り離していく。

分別した網は業者に買いつてもらい新たなナイロ

致すれば、他船の網の受け入れも視野に入る。漁網リサイクルの試みについて、ライブワーカークスの代表でもある中里社長は「これまで焼却するしかなかつた網が仕事につながり、利用者の収入にもつながった。利用者も一生懸命取り組んでおり、『三方よし』の事業だ」と絶賛する。丸吉の関川常務も「海洋

漁網のリサイクル実現

ン製品に再生し、親綱など
のロープ類は再び漁で使う
サイクルを描く。
当面は年4回ほどある正
進丸の水揚げに合わせて、
廃網を処理。ナイロン素材
であることなどの条件が合
環境が守られ 焼却による
排ガスや経費の削減にも効
果がある。自分たちが良い
例になり、活動が広がれば
うれしい」と強調。業界内
で取り組みが加速すること
を期待した。